

# エンカウンター（ENCOUNTER）

第 117 号

平成24年1月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「エデンのかけ橋 - モーク先生の教えと手紙」より（8）

日本での40年

忠実な宣教師の実りある働きに関する証言

ローラ・モーク

私は始めて1914年に参りましたが、日本人のことは何も存じてはおりませんでした。

私は心の中にキリストを愛する心を抱いて参りました。そしてキリストが愛しておられる方々を喜んで愛したいと思って参りました。

日本の方々を愛することは易しいことだとわかりました。そして私も大そう驚いたことなのですが、日本の方々が私を愛して下さることをじきに感じました。私が一緒に仕事をしていた学生たちは、私のところに花や、贈物を持ってきて下さいましたし、東京の名所を見物させて下さいました。そして彼らの学校の活動の中でも、私を仲間として扱って下さいました。それから暫くすると、一人また一人とキリストを彼等の救主として受け入れるようになりました。

これらの学生たちの多くが迫害され、ひどい場合には両親が立腹し、そのために家から追い出されているということを知った時、彼らに対する愛は一層深いものになって行きました。スーザン・バー

ンファインド記念教会(小石川白山教会)の現在の牧師は、初めて来た時は、まだ若い中学生でしたが、キリストを救い主として受け入れました。それから間もなく、彼がある日曜日の夜教会から帰りますと、激怒した父親が最後通牒を出しました。すなわち全く信仰を捨てるか、それでなければ家を出るか、翌朝までにどちらかを選ぶかを、決めなければなりませんでした。次の朝「キリスト教は止めるか」という、ぶっきらぼうな父親の質問に対し、息子の彼は「ノー」という代りに、頭を横に振るのが精々でした。数分後に、家無し子になった彼は、私の家の玄関に立っていました。クリスチャンの学生の一人(後の広野牧師)が、寄宿舍の一室に連れて行き、この若者の世話をし、彼の父親のために祈りました。すると何と1週間後には、父親は悔い改め、息子をわが家に迎え入れ、次の日曜日に教会に来て、彼もまたクリスチャンになりました。

日本の人たちが、キリストの愛をもっともっと必要としていることを知るにつれ、私の愛も増して行きました。

ごく最近の事です、私のバイブル・クラスに来ている娘さんが、ある晩彼女の身の上話を私にしてくれました。私は何度でもその話を繰り返して申し上げることができます。

この娘さんはある高等女学校を卒業いたしました。すると父親と兄から、ある青年との結婚話をきめ、1、2週間後には結婚するように言われました。その青年の名前をきいた時、とうてい彼とは結婚できないと思い、何日も涙と共に懇願しましたけれども、もう約束をしてしまったのだから、結婚しなければならないと言われました。そこで彼女は自殺を決意し、お友だちのところに行って相談をし、自分の計画を話しました。このお友だちはクリスチャンで、白山教会の会員でした。このお友だちは自殺を試みる前に、まず教会に来て神を見出すようにと勧めました。この娘さんは教会に来て、救われ、そして顔を輝かせて自分の回心について話しました。

「あなたの結婚の話はどうなりましたか」と尋ねますと、彼女は

答えました。「モーク先生、それが一番すばらしい事なのです。神様が分かったとき、とても嬉しくて恵まれ、神様が一緒に居て下さる限り、どんな事でも、そうです、この結婚だって今は耐えられると感じました。しかし結婚は延期となりました。それからこの青年は、私よりもっと好きだった別の女の子と、密かに結婚しました。私は大へん嬉しいのです。神様はとてもよくして下さいます。」

## 小石川バイブル・クラスの伝道

米国福音教会機関紙

東京には大きな大学がいくつもあり、何万という学生がいる。そして外国から招かれた教授たちの多くは英語だけを使って講義をするので、学生たちは皆英語をよく知っていなければならないという訳なので、新しい宣教師は、英語のバイブル・クラスを開けば、自分の住んでいる町でじきに伝道が開始できる。

バイブル・クラスに出席する大多数の学生は、外国人が英語を話しているのを聞く機会を得ようというただそれだけの目的で、最初はお出かけしてくるかもしれないが、その結果は、神の霊が彼らの心に働きかけているのだという事実気付かないうちに、罪を確信し、回心するということはあり得ることだし、実はよくそういうことが事実となって起っているのだ。そしてまたこれらの学生たちは、その講義の中でも、またどうしても読まなければならない英語の古典の中にも、聖書やキリスト教からの引用が大そう多いので、英文学を理解するためには、聖書のことをよく知っていなければいけないということに、気がついていて、そういう目的で来る者もある。これもまた結果としては、そういう人たちの多くが回心するということもよくある。...

現在のバイブル・クラスは、およそ4年前に、10人でスタートしたものである。少しずつ種は蒔かれ、何人かは導かれてキリストを自分の救い主として受け入れるに至っている。過去4年間に多数の者が救われている。そして彼らの大多数は、大学を卒業すると東京を去るけれども、報告によれば、彼らはどこに居ることになるとその場所で、彼らの光を輝かせているということである。

現有のメンバー総数は、70名である。現在の出席者のうち、18名がクリスチャンであり、教会員である。彼らは単にクリスチャンであるばかりでなく、魂の熱心な獲得者である。月に一度彼らの

先生と共に集まり、バイブルクラスの仕事について計画し、相談する。特にまだクリスチャンになっていない人たちに、どのようにして近づいたらよいかについて相談する。10月の例会では、祈りの環を作った。バイブル・クラスの会員の15人の名前の名簿をつくった。そしてこの人達のために毎日祈ることを誓約した。毎月曜日午後3時から6時の時間を、ミス・モークは特別に割いて、だれでも質問をしたり、精神生活について相談したりするために、自由に来てよい時間として使った。通例毎月曜日には、10人から20人の者が、ミス・モークを訪ねる。そして5時から6時までの1時間は、短い讃美歌と祈りとにあてられるのが慣習となっている。現在のクリスチャンの多くは、その祈りの時に、キリストに従う決心をするように導かれたと言っている。祈りに参加するのはクリスチャンだけではなく、まだクリスチャンになっていない者も同様に参加するのである。そしてこの静かな共に祈る時間が、多くの学生の霊的生活にたいそう大切なものになっているので、彼らは万難を排して出席するのである。ある学生たちは、この会に出席するために、寄宿舎での夕食にありつけないということさえ、わかっている。

10月17日の祭日に、東京市の近くにある美しい公園、井之頭公園へ遠足に出かけた。茶店で昼食を済ませ、出席者の写真を取ってから、美しい木々の下に閑静な場所を求めて、日英両語で讃美歌を歌って1時間を過ごした。そして祈祷会をもって、集会は終わった。出席者のうち、この日は生涯の中で忘れられない楽しい1日となるであろうと、言いながら帰った者は、おそらく1人や2人でなかったであろう。...

バイブル・クラスは、毎日曜日朝、定例の朝の礼拝前9時から10時までに開かれている。そしてほとんど全員が礼拝に残る。日曜日朝の参会者たちは、すべての働き人にとって励ましであり喜びである。9月と10月この教会の牧師は、17名に洗礼を施し、教会員として受け入れた。求道者に対しての教育も行なわれており、そのうちの数人は近く、われわれの群れに参加するものと思われる。

## 生徒たちの見たバイブル・クラスと月曜会

### (1) 大正時代

#### ミス・モークのバイブル・クラス

一人一人のために祈る先生

早稲田教会名誉牧師 篠崎茂穂

1918年11月のある日曜日、クレマー先生に紹介されて、ミス・モークのバイブル・クラスに始めて出席した。...

その後、毎月曜日の集まりに出席し、この会を通して会員各自のことを知らされ、そこには他には見られない会員相互の交わりが深められ強められて行くのを知った。先生はバイブル・クラス及び月曜会のためには、夏休み中もわざわざ軽井沢から帰京されて集会を続けられた。ここに先生がバイブル・クラス、また月曜会の出席者一人一人をいかに熱愛して下さったかを知らされた。わたしは基督者の師弟間、相互間の交りということについてこれまで全く他に見られない新しいものを見、また知らされ、その一員となり得たことに深い感謝を捧げざるを得なかった。

幾年か経過して、モーク先生に大切にしておられる聖書の一節を伺ったところ、左の個所を教えてください。ピリピ人への手紙1章1節から11節である。

「キリスト・イエスの僕たち、パウロとテモテから、ピリピにいる、キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、ならびに監督たちと執事たちへ。わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している。そして、あなたがたの内に良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。わたしが、あなたがた一同のために、そう考えるのは当然であ

る。それは、わたしが獄にとらわれている時にも、福音を弁明し立証する時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者として、私の心に深く留めているからである。私がキリスト・イエスの熱愛をもって、どんなに深くあなたがた一同を思っていることが、それを証明して下さる方は神である。私はこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、鋭い感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るように。」

この聖句を拝読して、先生の伝道や我々に対される指導精神を知ることができた。特に先生が「キリストの日に備えて」我々を指導して下さったことを、今日に至って一層感謝を増し加えられるのを覚える次第である。...

## (2) 昭和初期

### 昭和初期のマンデー・ミーティング

澤 正雄

モーク先生の伝道の中で、最もユニークなものとは言えば、このマンデイ・ミーティングであろう。それに似たものは、他所で経験したけれども、矢張りどこかちがうと思った。そこが、マンデイ・ミーティングがマンデイ・ミーティングである所以であろう。

マンデイ・ミーティングについては、日曜日の朝バイブル・クラスの前席で、案内がある。司会者もお出で下さいと言うし、モーク先生も、仰言る。“Tomorrow afternoon we have our Monday meeting at my house. It begins at three, and ends about six, but you are free to come and go you like. Please come and join our Monday meeting. (明日の午後私の家でマンデイ・ミーティングを開きます。3時に始まって、6時頃終わります。しかし、いつお出でになっても、いつお帰りになっても結構です。どうかマンデイ・ミーティングにお出で下さい。)

今の牧師館の石段は、昔の焼けた宣教師館の階段だと思ふ。石段を昇ってベルを押すと、大いモーク先生が、独特の微笑をたたえて、“Please come in.”「どうぞお入り下さい」といって、ドアを開けて下さる。廊下の左手が、マンデイ・ミーティングの部屋である。ソファや椅子が置いてあって、無理をすれば30人ぐらゐは入れたであろうか。部屋にはラジエーターがあり、隅には大きなアメリカ製の電蓄が置いてあったのも珍しかった。

しばらくは、われわれ仲間どうしの自由な語り会であった。学校がちがい、専攻もちがい、郷里がちがっても、ここに来ると、お互いに不思議な親近感を覚えた。

4時頃になると、コーヒーとクッキーを先生が出して下さい。その仕ぐさの中にも、わが子のように青年たちを愛して下さい、先生の愛情を汲み取ることができた。それから讚美歌を、二つ三つ歌った。「だれかお証しをなさる方はありませんか」と仰言ると、誰か先



輩格の方が、立ってお話をした。ときどき、大先輩、小西先生、広野先生、藤田先生、篠崎先生、栗野先輩、長谷川進一先輩等が出席されて、われわれ後輩にお話をなさって下さった。これは感銘が深かった。

それからモーク先生の聖書のお話があった。モーク先生のお話は、その場合、場合で少しちがった感じがあったと言え、言い過ぎであろうか。日曜日朝のバイブル・クラスは、書体で言えば、楷書、いかにも教会という場所にふさわしかった。マンディ・ミーティングは、いわば草書体、自由で、肩を張らないで、ご自宅に似つかわしいものであった。

それが終わると全員で、一人一人お祈りをした。初めて友人を連れて行ったところ、順々に祈りだして、彼の番になり、彼は他人の前で祈ったことがなかったので、大弱りをし、後で恨まれたこともあった。しかし、先生は決して強制することはなさらなかった。この友人たちとの祈りの経験は、すばらしかった。この地上で天国に最も近い場所は、マンディ・ミーティングの部屋だと思った。

そこで、ごあいさつをして帰ろうとすると、先生は呼び止めて、1冊の本を手渡し、これを読んで、2週間後のマンディ・ミーティングで感想を発表して下さいと、仰言る。何のことはない宿題である。例えば Stanley Jones の “Christ Along the Indian Road” (スタンレー・ジョーンズの「印度途上のキリスト」) といった類である。このようにして、有益なキリスト教の名著を、次から次に読ませて、われわれを教育して下さいだったのである。われわれ一人一人の魂の成長を願って、祈りを注いで下さった先生に対する感謝は尽きない。

### (3) 終戦後

## 高円寺・目白・コンセントハット時代のバイブル・クラス 老いの日を再び燃やして

森山徳長

#### 1

1946年(昭和21年)5月の或る月曜日の午後、わたしは入江義信先生を待って中野駅のホームに立っていた。彼は中野組合病院のインターンとして研修中であった。わたしたち2人は、焼け跡のただ中の道を線路沿いに高円寺の方へ、ゆるい坂を上って行った。焼け残った住宅地に一角に、東大医学部薬学科教授の石館守三先生のお宅があった。

モーク先生のマンデイ・ミーティングに出席させていただいたのは、この日がはじめてであった。数人の男女の学生たちが、石館先生の書斎で集会を持った。「ヤコブの梯子」を歌ったのを記憶している。集会の終りにモーク先生は、当時石館邸2階座敷で持たれていた小石川白山教会の礼拝に出席するように言われた。さからうことのできない威厳がやさしさの中にあった。

この時以来、日曜日朝はバイブル・クラスと礼拝、月曜日の午後は月曜会に通う生活が始まった。

この年の11月3日、日曜日、二間続きの2階座敷で守られた礼拝のあと、わたしは藤田昌直牧師から受洗した。その場には、尾藤俊一、石館教授と藤田牧師のご一家、瀬川乃志、小牧誠夫、柏木希介、中島レイ子ほか約30名の人々がいた。

#### 2

それより前6月末、モーク先生は前年から持ち越しておられた休暇で帰米しておられ、その間のバイブルクラスは、P・S・メーヤー先生が持って下さっていた。オクラホマのモーク先生には、受洗の決意をお便りした。折り返して先生から喜びのお手紙をいただいた。

やがて翌年8月に先生は日本に戻られ、目白の神学校構内のメー

ヤー館にお住まいになり、再び石館邸での礼拝、月曜会に奉仕された。

休暇ですっかり健康を取戻されたこの頃のモーク先生は、東奔西走、非常にお忙しかったようである。しかし、バイブル・クラスでの先生は、いつも満面笑みをたたえて、その温顔を見るだけでわれわれは心の安らぎを覚えた。

18歳の少年であった私は、人生問題に悩んで、或る秋の夕方祈って頂こうと目白の先生宅をお訪ねした。玄関のベルを押すと、出て来られたヘルパーの剣持輝子さんが、「今日は遠くから帰られたばかりで大変お疲れなんですよ」という。その肩越しにミス・モークの声があった。「お入りなさい、ミスター・モリヤマ」

先生のお顔に疲労の色が濃かったが、私の話に耳を傾けられたのち、ただ祈りましょうと仰しゃって、熱心に祈って下さった。18才の少年の悩みはたちどころに雲散霧消してしまい、おいとまして目白駅に向かう足取りは軽かった。若いわたしにとってなつかしい、強烈な印象に残る事件だった。

### 3

1947年12月はじめには、待望の蒲鉾兵舎風の会堂が白山に出来上り、翌年はプレハブ造りの宣教師館が完成した。

日曜日の会堂には人が入りきれずに、窓越しに説教を聞くといった戦後のブームが起こり、とにかく集会は盛んになった。また月曜会も日を追って盛になった。

この頃のバイブルクラスについて述べてみよう。

第1の特長は女性が男性と肩を並べて多く出席したことである。新憲法下、男女同権・デモクラシーの社会になったのであるから、当然のことでもある。しかし戦前には決してなかったことである。それは戦後、宣教師はモーク先生お一人であったことにもよる。

第2には、日曜日の朝、小石川白山教会の礼拝前のバイブル・クラスでは、福音書、黙示録等を連続して講義された。夕方は本所緑星教会の夕礼拝の前に同様に教えられたが、本所の場合には広野夫

人や入江義伸氏が通訳をされた。

家が本所であったので、学生時代のわたしは日曜日の朝は白山へ、夜は本所へ、そして月曜日午後は授業の帰りに白山の宣教師館へ通った。

第3は、礼拝前のバイブル・クラスは当然のことながら折り目正しく、ガリ版刷りの梗概を配って話された。先生の語り口は本当に独特で、決して学者の講義風ではなかった。

月曜日午後は、ずっと戦前からのパターンであった由であるが、3時頃から集まって、讃美歌を先生のオルガン伴奏で歌い、礼拝前のそれとは違った、もっとソフトな口調で聖書の話なされた。かみかみ、大変易しい、むしろ単純なお話しであった。

その後の祈りがまた独特で、一人一人が必ず順番に祈った。そして先生がしめくくりの祈りをされた。

そして先生自ら焼かれたクッキーを添えたコーヒーを戴きながら、歓談のひとつときを持つ。そこに集う者は自然に一つの連帯感によって、強く結び合わされる。こういう風であった。

#### 4

1948年から50年頃の月曜会の出席者は、小石川白山教会では、勝田義郎、小牧誠夫、黒田和雄、岡崎正敏、菊地裕らの先輩、柏木希介、鈴木宏、鈴木荘一、栗野茂穂、家山光雄、田中聖雄らの若手・学生、女性では藤田夫人、柏木光江、太田慶子、松本昭子、森山レイ子、中島清子、黒田マリ子、本所緑星教会からは小西芳之助、広野馨、入江義伸、花房光江、渡辺滉などの人々がよく出席した。

1951年会堂本建築が完成し、翌年ローラ・モーク・ホールが完成して、形の上でも40年の日本伝道で上げた成果、すなわち主に従う魂を獲得して教会の柱とする事業を完成して、1953年65才定年のため帰国せられた。